

音無き音

能村 研三

洋画家中山忠彦先生

一瀑を軸とし紅葉はじまれり

霧呼んで巖に棲めるほとけたち

百畳に柱のなかり寒稽古

没り際の陽を深く吸ひ冬木の芽

落葉踏むけものごころもありにけり

鍋の蓋をどるといふも狩の宿

年毎に年疾くなる葉付き柚子

野暮用は早めに済ませ冬至風呂

考への前に動く手年の暮

雪となる音無き音に目覚めけり

市川の国府台にお住まいで芸術院会員の洋画家中山忠彦先生が昨年9月に亡くなられた。89歳だった。中山先生宅を初めてお訪ねしたのは、私が市川市の文化課長時代で、今から25年前であろうか。国府台の緑地に包まれて建つ洒落た洋館が先生のお宅で、ヨーロッパのアンティークな家具に囲まれた大きなアトリエや、収集したアンティークドレスを保管した部屋も見せていただき感激したことを覚えてい

る。先生は九州のご出身で、特に大分県の中津にお住まいだったこともあり、「沖」の大分支部が中津で活動していたことなどで話が弾んだ。平成13年には市川市文化会館で第3回の市川の文化人展「洋画家中山忠彦 美の世界展」を開催し市民から大きな反響を得た。「沖」の創刊40周年記念号は中山忠彦先生からの玉稿で巻頭ページを飾らせていただいた。その一文を紹介する。

「日本短詩型文学の、他に比類の無いすぐれた表現形式である俳句に於いても、絵画での素描と通底する世界が見えて来る。素描は、それを起点にして展開し拡大するイメージの核であり、又一方俳句は、人間と森羅万象の神秘が収斂された核とも言えるだろう。俳句は精選された日本語によって紡がれた美のエッセンスである。」（平成22年「沖」創刊40周年記念号「俳句と素描」）

令和2年10月に中山忠彦先生と秋山忠彌先生のお二人が市川に是非美術館を作りたいというお話をされ、その翌月に私にもお声がかかり、準備会が発足した。その打ち合わせはいつも先生宅で行われ、春になるとミモザが黄色の花を鮮やかに咲かせていたので、この会を「ミモザ会」と名づけて活動を始めた。

令和4年12月には中山先生、秋山先生と私の三人が代表を務め「市川市に美術館を要望する会」が正式に発足した。令和6年4月には市の組織の中に「美術館構想担当室」が新設され、美術館構想に向けてスタートした。これもひとえに中山忠彦先生の熱意ある声が届いたからである。中山忠彦先生のご冥福を心よりお祈り申しあげたい。

能村 研三